平成２０年１２月１日発行

かまにし

第３０号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

地域に根付く　相生剣友会

今回のわがまちの顔に蒲田西地区に広く活躍している剣道の子供達とその指導者にお会いをして、活動の様子・温かい雰囲気に接してきました。

初秋の土曜日の午後、相生小学校の体育館からエイッエイッという元気な声が聞こえてきます。体育館の中では活気に満ちた小学生の練習風景が見られました。

相生剣友会は、今から四十年ほど前の昭和四十四年に相生小学校のＰＴＡ主催により立ち上げられました。

それ以来現在まで永年にわたり輝かしい歴史と伝統のある会として続いております。

ここまでの道のりには、大変ご苦労も多々あったと名誉会長様よりお話を伺いました。

発足当時は、六十人位の人数で活動しておりましたが、昭和五十年に入り、相生小学校のＰＴＡから切り離されることになり、当時、ＰＴＡ会長の故横山一氏の努力により、相生剣友会として新たに活動することとなったそうです。

その時期が一番多い時で、百六十人位の人数だったそうです。今では、小学生、中学生、大人も含めて五十人位の会員数です。

現在では、ＰＴＡを離れて、相生小学校の児童だけでなく、道塚小学校、矢口東小学校、おなづか小学校、そして蓮沼中学校、御園中学校、安方中学校、また、地域での私学の学生・大人の方々も参加する地域に密着した活動となっております。

現在指導にあたっておられる十三名の先生方は、すべて、この相生剣友会の卒業生です。

この剣友会で得られる資格は、六級から二段までだそうです。

大変質の高い先生方の指導力の下での鍛錬の成果が毎年の大会では、優秀な成績を収めています。

平成十九年度の都立蒲田高校で開催された蒲田支部大会では、小学生一・二年の部、小学生三・四年の部、小学生五・六年の部、そして中学生の部の全四部門で優勝という輝かしい成績でした。

なお、その前年度（平成十八年度）の成績は、小学生一・二年の部で惜しくも優勝を逃しましたが、他の三部門は全て優勝という素晴らしい成績でした。

今年も蒲田支部大会が十月十九日に行われました。小学生一・二年の部で個人優勝、小学生五・六年の部で団体三位、中学生男子の部で団体優勝、中学生女子の部で個人三位という優秀な成績を収めました。

相生剣友会の皆様方、これからも、剣道というスポーツを通じて心身ともに鍛え、そして地域の健全育成のために、ますますのご活躍を心より願っております。

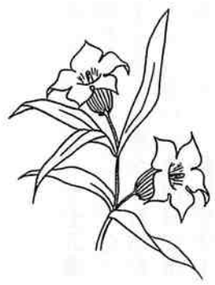
（取材　勝俣・石渡・柳通委員）

投稿　石鎚山登山

総勢十四名の山の仲間。家を出た時は小雨だったが、松山空港に着いた時は初夏の陽射しだった。登山口の土小屋までの約二時間は車。面河村に入る。前からも後ろにも車はない。天気が変わりやすく、晴れたり曇ったりの中、緑に包まれた林に藤の花・朴の花が見え、風情がある。時折、お遍路さんに出会う。独りで歩いている人が多いが同行二人といい弘法大師と一緒とのこと。午後二時に土小屋着。登山の準備、軽く体操をする。千五百メートルから登るので頂上までは約五百メートル。リーダーがゆっくり歩いてくれるので、体が徐々に慣れてゆく。雲が走り、陽を浴びた山々の耀きは思わず足を止め見入ってしまう。鶯の鳴くのも心地よく、全身が緑に染まって、山に溶けてゆく感じ。曙躑躅・竜胆などが目を楽しませてくれる。いよいよ本格的に登る鎖場になった。頂上まで直角に近い岩々に鎖が添えられていて、手で鎖を持ち替えながら登る。六、七十メートルある。試しに四、五メートル登ってみたが、初めてのことで怖く、靴が岩になじまず、あきらめて巻き道を通る。夕方、石鎚頂上山荘着。一般的には山荘のあるこの弥山（一、九七四メートル）までの登山が多いとのこと。雨にならなくてほっとした。

石鎚山は日本百名山、日本七霊山のひとつでもあり、山岳信仰の聖地で登山ではなく「登拝」と呼ぶそうで、修験者が多い。頂上には神社があり、神主さんが毎日お勤めをしている。頂上より全て下の山々が見渡せる。夕方の閑けさの中、雲が流れ夕焼けが次から次へ山に一瞬の輝きを与えていた。天狗山が急峻に聳え立っている。切り立った大岩が連なって見える。三角形の細い一辺を登る感じで怖気づく。気温、室内十四度、外は三度でしかも強風。就寝前、外に出た。今夜は新月で月明かりはなく、金星が一番星の見得を切り、大きく煌めいていた。天空には北斗七星がはっきり見え、無数の星。めったにいられない光景に身にしみる寒さと立っていられないほどの強風にもめげず、山小屋に戻る気にならなかった。昨夜の星でご来光を期待したが、あいにく曇りで、時折小雨、風はかなり強い。雨は止んだがこの強風のため、リーダーが偵察登山をし、安全を確認してから、登り始めた。途中の岩場で足がすくんだ。絶壁だ。山登りを始めて数年、本格的な山はまだ三、四つしか登っていない。ましてやごつい岩場は初めてだった。手を伸ばしやっと岩を掴み、胸も岩に押付け、動くことができない。これでは足をどこに置くのか全く見えない。二人のベテランに右足はこの岩、左足はこの裂け目にと足を添えてもらったが、正直、生きた心地がしなかった。一瞬どうしてこんなところにきてしまったのかと後悔もした。やっとの思いで頂上。恐る恐る下山し、胸をなでおろしたが、現金なもので又登りたくなった。喉元過ぎれば・・・である。登りきった達成感を味わい、岩登りの貴重な体験をした嬉しさと自信も少し持てた。怖さ二倍、感動三倍の天狗山だった。帰京。ビールを買い、蕗を煮、豆を茹で、じゃこ天を肴に、肝を冷やしたが楽しく、忘れられない旅の思い出に浸りながら、石鎚山に感謝し、乾杯！

（洋子・新蒲田在住）



編集後記

今月の特集記事では、型染の人間国宝・芹沢銈介さんを取り上げました。「型染ってどんなもの？」と思われる方もいらっしゃるのでは。現在、かまにし17第27号でご紹介した進藤鴻さんの型染の作品が、蒲田西特別出張所の区民ギャラリー蒲田西に展示されています。出張所にお越しの際は、その素晴らしい作品をぜひご覧ください。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，875人
	女	27，240人
	計	57，115人
世帯		30，685世帯

平成２０年１１月１日現在

人間国宝　芹沢銈介

奥様とご一緒に

目の前の呑川では職人たちが、膝まで流れに浸かり、染付けの終わった布の糊を洗い流していました。その脇を、芹沢家で飼っていたのか、二羽のアヒルがのどかに泳いでいました。

庭には季節ごとに、大輪のバラが咲き誇り、奥さんと御一緒に庭の手入れをしている芹沢さんを、よく見かけました。』

以上は、戦前から芹沢さんと親交のあった方が、懐かしそうに語ってくれました。

現在の呑川は、切り立ったコンクリート護岸に囲まれ、流れは昭和後期に比べれば、多少は綺麗になったとはいえ、とても清流とは言い難く、今となっては六十年前ののどかな風景を推し量るしかない。

工芸作家・芹沢銈介が家族や弟子たちを引き連れて故郷静岡より上京、大田区西蒲田四丁目二十一十五（当時・東京府蒲田区蒲田町百二十七番地）に移住してきたのは、昭和九年（一九三四）であった。建物は住居と工房を兼ね、芹沢はこの移転で初めて十分な仕事場に恵まれ、仕事に集中できるようになった。

移住後の活躍は目覚しく、「いろは屏風」「機織図屏風」「紙漉図屏風」「和染絵図」「絵本どんきほーて」と次々に傑作を世に送り出す。中でも「絵本どんきほーて」は、一年近い構想の下、スペインの騎士を日本の武士に見立てた上に、直接型紙に色を刷り込む手法で、新たな試みの絵本として完成させた。この手法はその後の和紙に型染めする仕事につながり、多くの型染め絵本を生み出す契機となった。

「絵本どんきほーて」より

蒲田工房

『戦後の復興もままならず、付近は家数も少なくて、空き地があちらこちらに目だっていた頃に、芹沢さん御一家がこちらに引っ越して来ました。

広い敷地には、染め上がった布地が、弓形に張った伸子（しんし・両端に針がついた竹ひご）を幾重にも連ねた状態で風に揺らいでいました。

出会い・紅型と柳宗悦

芹沢銈介は、明治二十八年（一八九五）、静岡市の呉服商の家に生まれ、幼い頃より図画・工作を得意としていた少年で、大正五年（一九一六）東京高等工業学校（現在の東京工業大学）図案科を卒業し、図案家として活動していた。大正十四年（一九二五）柳宗悦（やなぎむねよし）が記した「工藝の道」に感銘を受け、以後柳とは深い縁を結ぶようになる。

昭和三年（一九二八）上野公園で行われた国産振興博覧会に特設された民芸館で、沖縄の紅型（びんがた）の美しさに目を張った芹沢は、「その模様、その色、その材料、こんなに美しい染物があるかと、夢のような思いでした。」と後日、感動的に語っている。

昭和の初期には、蝋染、型染と次々に新しい手法による作品を発表し、また柳宗悦の主宰する民芸運動の機関紙「工芸」の表紙すべてを摺伏手法による型染模様で仕上げ、毎月のデザインの創案と大量かつ均質に染め上げるという仕事は、工人としての芹沢を鍛える格好の機会となった。この装幀が式場隆三郎に着目され、彼の著書の装幀を受け持ち、さらに広く出版界から注目を得て、装幀のみならず、扉・小間絵（カット）・挿絵などまで型染の仕事の幅を広げることになっていく。また型染以外にも、昭和十一年（一九三六）に開館した日本民芸館のために陳列家具の設計を手懸けるなど、幅広い活動を見せるようになった。

昭和十四年（一九三九）、柳宗悦ら民芸の同人たちと初めて沖縄を訪問する。およそ二ヵ月に及ぶ滞在中、那覇の形屋で紅型の技法を丹念に学び、その翌年も沖縄に渡り紅型の追求に努めている。この二度にわたる沖縄訪問の成果は、後年製作される「沖縄風物」はじめ各種の作品のモチーフとなった。

工房焼失

昭和二十年（一九四五）戦災により蒲田の家屋、家財のすべてを失う。以後、昭和二十四年に蒲田の旧地に戻るまで、都内各所に転々と住いを移しながらも、創作活動は活発で、昭和二十年末には、その後毎年出され続けることになる、和紙型染カレンダーや、同二十二年には染絵本「沖縄風物」を刊行している。一方、多摩美術大学や女子美術大学の教授に就任し、後進の指導にあたり、さらに柳宗悦らとともに、国展工芸部の再建に尽力するなどの社会的活動への参加も盛んになった。

人間国宝に指定され

昭和三十年（一九五五）蒲田の敷地内に有限会社・芹沢染紙研究所を発足させる。この研究所は、染色を志す人が集まり染紙を通じて染物を学ぶ場となった。

昭和三十一年に芹沢は型絵染の重要無形文化財保持者（人間国宝）に指定される。六十一歳。伝統的な型染を昇華させ、現代の視野を持ち、自ら下絵を描き、型を彫り、染め上げ、そのどの工程にも創造性を生かした独自の芸術的領域をもつ、型絵染の世界を構築した、ということである。

「人間国宝」の指定により身辺が煩雑になり、それを嫌い翌三十二年に鎌倉市津村の農家の離れを仕事場とする。蒲田と往復しながらの独居生活は十四年間。七十五歳になる昭和四十五年（一九七〇）の九月まで続く。豊かな自然を残した当時の津村の農漁村の情景は、芹沢に新たな創作モチーフを与え、「津村山々文着物」や「鯛泳ぐ文着物」他の作品に結実していく。

お弟子さんと工房で

蒐集家・芹沢銈介

芹沢銈介のもう一つの顔。それは蒐集であった。古今東西上手、下手を問わず布片あり、陶器あり、民具あり、中にはアンデスの土民人形から唐三彩美人、丹波木綿からコプトの裂地まで、一見、不調和に見えるがこれらが少しも騒がしくない、それは今まで経験したことの無い濃密な不思議な世界であった。古今あらゆるものの中から波長の合ったものだけが、息づき響きあい、芹沢が指揮をとるタクトのもとに、見事なシンフォニーを奏でているようだ。

パリ　SERIZAWA

芹沢銈介の仕事は、海外においても注目された。昭和五十一年（一九七六）、乞われて、フランス・パリの国立美術館において「SERIZAWA」展が四ヵ月の長きに渡り開催され、大成功を収めた。八十一歳。

昭和五十八年（一九八三）八月、芹沢は病に倒れる。満八十九歳の誕生日を翌日にひかえた昭和五十九年四月五日、静かにその生涯を閉じた。

後に、住居跡を大田区で買取り、資料館にという話もあったが、実現することは無く、現在は大きなマンションが建ち並び、敷地の一角に「人間国宝芹沢銈介が愛した土地」と、芹沢独特の意匠文字の中から「風」の一文字が刻まれた碑が残されています。

西蒲田四丁目に建てられた碑

参考文献
芹沢銈介のあゆみ　北村敏
出会いしものすべてよし
堀尾真紀子

（取材　柏村・石渡・伊藤・都築委員）